

報告

徳島大学教員と徳島県内の高校関係者へのインタビュー調査 ——高校から大学への教育の接続をより良いものにするために——

古屋 玲¹⁾ 齊藤隆仁^{1,2)} 三好徳和^{1,2)} 荒木秀夫^{1,2)}

¹⁾ 徳島大学全学共通教育センター ²⁾ 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究所

要約：これまで高等学校までの教育内容にゆとりを持たせていたことに加え、少子化による大学進学率の上昇が相まって、大学初年度で学ぶべき水準についていけない学生の存在が徳島大学においても顕在化している。一方で、大学卒業生の質は一定の水準を保つべきという社会的要請がある。この現状を鑑み、本学の理念に基づく、教育目標と教育水準を堅持するため、高校と大学の接続教育に求められるものは何かを明確にすることが求められている。このため、アンケート調査では拾い上げることが容易でない、教職員の率直な意見を2012年夏から冬にかけて大学と高校双方における対面インタビュー調査によって収集した。寄せられた意見と教育現場からの示唆の大部分は、中央教育審議会や日本学術会議等の答申等と整合する。したがって、大局的な見地に立ちつつ、地域の特性も考慮した、より良い高等教育システムを作り上げることが求められている。

(キーワード：高大接続、専門教育への接続、徳島大学、徳島県内高校、対面調査)

An Interview to Faculties and High Schools in Tokushima ——Towards Seamless Connections from High Schools to University——

Ray S. FURUYA¹⁾, Takahito SAITO^{1,2)}, Kazunori MIYOSHI^{1,2)} and Hideo ARAKI^{1,2)}

¹⁾ Center for General Education, The University of Tokushima

²⁾ Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima

(Key words: Connections from high schools to university, connections from general education to professional education, the University of Tokushima, high schools in Tokushima, interview)

1. 背景

最近10年間に顕著な18歳人口の急激な減少と大学進学率の上昇という外的要因の変化と入試科目選択の多様化に伴って、徳島大学においても、入学者の学力水準や学習態度に大きな変化が見られると指摘する教員が増えている。一方で、高等学校（以下、高校）における理科と数学（以下、理数科目）を中心とする、学習指導要領の改正に伴う履修内容の見直し^{1,2,3,4)}を受け、（新課程による高校での学習を終えた新入生が入学する）2015年度以降の大学生の基礎学力を懸念する教員は多い。このような状況のもと、徳島大学においても県内の高校と協力し、高校から大学への教育内容の接続（以下、高大接続）と双方の授業改善のために議論が重ねられ、幾多の試みが実践されてきた⁵⁾。

2. 調査の目的

上述のような変化を踏まえ、学内の教員だけでなく、徳島大学への志願者が多い県内の高校関係

者の率直な認識を把握することも必要であると考えた。これには、高校教育と大学の専門教育を繋ぐことが使命である全学共通教育センターが目指すべき方向性を、現場の声も十分に考慮しつつ、見極めたいとの考えが背景にある。

徳島大学においては、従来から学生の学習と生活の実態調査^{6,7)}がアンケート調査に基づき、継続して行われてきた。しかしながら、共通教育の前後の教育課程である、高校と大学専門課程に携わる教員個人の率直な声を拾い上げたインタビュー調査は存在しなかった。このことが本調査実施の大きな動機であった。

3. 調査の手法

3.1 徳島大学内のインタビュー調査

調査方法は、筆頭著者による対面インタビュー形式とした。アンケート調査や電話調査の形式を取らなかった理由は、本調査の意図を被インタビュー者に十分に理解して頂いたうえで、できる限

り率直な意見を述べて頂きたいからであった。

この目的のために次の二点に留意した。一つは、出来る限りゆとりのある時間と場所を選ぶことである。結果として夕方にインタビュアーが対象者のオフィスを訪ねるケースが大部分となった。二つ目は、インタビュアーが結論を誘導することなく、また他の教職員へのインタビュー内容も知らせず、自由に語って頂くことである。インタビューの趣旨を説明する導入部では、次の二点をまとめて質問した。

【質問 U1】 1, 2 年生の教育において日頃お考えになっていることを教えてくださいか？

【質問 U2】 学力低下を指摘する声が多く聞かれますが、どのようにお考えでしょうか？

インタビューの過程で議論が「最近の若い者」論議になりつつある場合は、インタビューの趣旨を再度説明し、議論を本論に戻すように求めた。

インタビューの記録はすべて手書きのメモを残すだけとし、録音はしていない。手書きメモとインタビュアーの記憶をもとに、インタビュー当日のうちに記録を整理した。また、英語で行なったインタビューであっても、日本語で記録を残した。このような調査方法を採用したため、各教員の本音をかなり引き出すことができたと考えている。しかしながら、その代償に客観性が多少犠牲になったことは否定しない。

調査対象は、これまでに全学共通教育センターや各学部において、1, 2 年生を対象とする基礎的な教育に深く携わって来られた教員や各学部の教務委員長や教務委員経験者等をリストアップし、インタビュー時間の予約が取れた教職員から実施した。結果として、2012 年 7 月下旬から 12 月上旬までの期間に、学内関係者約 40 名に個別インタビューを行なった。なお、インタビューに要した典型的な時間は 1 時間半である。

3.2 徳島県内の高校関係者へのインタビュー調査

学内でのインタビューと平行して、徳島大学への志願者の多い徳島県内の高等学校の教員及び徳

島県教育委員会 徳島県立総合教育センターに所属する、高校各教科の指導主事との懇談も行なった。学内教員へのインタビューとの大きな違いは、必ずしもインタビュアーとの一対一のインタビューではないことである。例えば、校長室で校長と複数の教諭を交えての懇談、特定の教科の教諭に集まって頂いての懇談、参観させて頂いた授業が終わった直後の廊下での懇談、徳島県立総合教育センターでの懇談など、形式は多岐に渡る。インタビュー対象者は延べ 35 名となった。

高校関係者へのインタビューにおいても、冒頭に次の二点を質問するだけに留め、自由に語って頂くように心がけた。

【質問 H1】 高校教育において日頃お考えになっていることを大学教育への接続という観点からお話し頂けますか？

【質問 H2】 学力低下を指摘する声が多く聞かれますが、どのようにお考えでしょうか？

4. 結果

4.1 徳島大学内でのインタビューから

入試の現状を手放しで賞賛する教員は皆無であった。入試で課さない教科の基礎学力の不足を指摘する教員が本学にも多い。積み重ねが学習の基本的なスタイルになる理科系科目のうち、物理学と生物学の基礎学力不足が初年次教育に大きな影響を及ぼしていると指摘する教員も非常に多い。一方、化学はよく勉強されていると評する教員が多かった。これは、入試において化学は広く選択される教科のためと考えられよう。数学は、計算力などの運用能力の訓練不足を指摘する声が全学的に聞かれ、入試の難易度の高い学部では応用力の不足を指摘する教員が目立った。

基礎学力不足を補完するリメディアル教育の内容そのもの、及びリメディアル教育の実施方法については評価が分かれた。従って、その効果についても必然的に評価が分かれた。今後は各学部の意見や高校関係者からの示唆（後述）を盛り込みながら、リメディアル教育の内容そのものとシステムの改善に務めてゆくべきである。この際、入

試と初年次教育を有機的に結びつける体制を如何につくるかの議論を加速すべきであろう。

総じてどの学部学科からも、過去10年程度のタイムスケールでの基礎学力低下を指摘する声は多い。一方で、学力低下は顕著に見られないという意見もそれなりにある。また、学力の上位層の学生がさらに伸びることができるようなシステム作りも忘れてはならないという指摘も多かった。特に語学の教員からは、学力別クラス制度を導入し、個々の学生の実力に見合った指導をしたいとの声が聞かれた。

学生のコミュニケーション力の不足だけでなく、ノートの取り方を含む、文章力の低下など、大学で学ぶためだけでなく、社会へ出てからも広く必要とされる能力に疑問を呈する声は多い。専門教育と連携しつつ、どのように底上げを図るべきかの議論を早急に開始することが望まれる。

学生の学習態度を嘆く声はどの教員からもさまざまな形で聞かれるが、圧倒的大多数の教員は「今の学生は良い意味でも悪い意味でもまじめ」と語る。学生自身の学習態度に問題があるのも事実であろうが、学生を取り囲む環境のなかに、じっくりと学習することを妨げる要因があることを念頭に教育環境の改善を図る必要がある。このうち、もっとも目立ったのは、就職活動による勉学の一時的な中断が、4年次の卒業研究指導に与える影響であった。

インタビューのなかでかなりの時間が費やされたのは、学内の教育システムに関する意見の表明と提案であった。現状が徳島大学のあるべき姿であると自信を持って言える教員は皆無であると思われる。インタビューを通じ、個々の教員が建設的でオリジナリティの高い改善案を持っていることが明確にわかった。しかしながら、言い出したら自分がそれをやらねばならないという雰囲気や過去の経緯、手続きの煩雑さを考え、「それほど面倒ならば現状で我慢するか」と考えてしまいがちのようである。日常の会議とは別に、ざっくばらんに意見交換できる場を設けるなど、思い切った試みを実行に移してよいかも知れない。

4.2 徳島県内の高校関係者へのインタビューから

十分に予想されたことではあるが、徳島大学において、我々が日常的に目にする学生の学習にのぞむ姿勢や生活態度は、すでに高校の段階で顕著なようである。例えば、計算間違いをしたら赤ペンで修正するのではなく消しゴムで消してしまうといった、失敗を恐れて未成品を嫌う傾向や、ノートの取り方が訓練されていないことなどである。このような学生の汎用的技能の向上や学習態度の改善と言った問題は、本質的には家庭を含めた小学校から大学までの教育全般の文脈で論じられるべきものであろう。

特筆すべきは、数学や理科の高校教員からは大学で行なわれているリメディアル教育の内容に関して、高校での教え方と高校生の理解の仕方を踏まえ、具体例を挙げてさまざまな示唆を頂いた事である。これらは大学教員にはなかなか気が付きにくい点であり、今後、リメディアル教育の充実を図っていくうえで学ぶべき示唆である。

県内高校と教育委員会関係者への面接調査では、インタビューが長時間になればなるほど、「これだけは徳島大学関係者にぜひとも知っておいてほしい」とのメッセージが溢れ出てくる場面が多かった。例えば、我々が高校との教育内容の接続に腐心するのと同じように、高校関係者も中学と高校との教育内容の接続に多大な時間を要していることなどである。また、地域の大学としての徳島大学への率直な期待感と厳しい意見も寄せられた。大学における教育活動と研究活動は表裏の関係にあり、両者のバランスを取りながら、どちらにおいても高校生にとって魅力ある大学を作る絶え間ない努力が必要であることを教えられた。

5. まとめ

今回のインタビュー調査には、調査対象者の選択が無バイアスでないなど、さまざまな限界があることを我々は強く認識している(第3節)。その弱点を差し置いても、我々が耳を傾ける必要のある貴重な示唆ばかりである。インタビューに応じられた方は現状認識を述べられるだけでなく、徳島大学と徳島県における高等教育をよりよいものにするために、各々の立場から解決案を提案して

下さった。それらは、より大局的な見地^{8,9,10}から示されている見解と須く整合する。それらの示唆を集約し、徳島県と徳島大学の実情に合わせ、ひとつでも多く実行に移してゆくことが、我々に課せられた使命であると考えている。

謝辞とお願い

多忙のなか、貴重な時間を快く割いて下さり、きわめて率直な意見を寄せて下さった、すべての皆様に深く感謝致します。とりわけ、学内外のインタビューを実施するにあたって、コーディネートの労を取って下さった方々に心からお礼を申し上げます。

参考文献

- 1) 文部科学省, 高等学校学習指導要領解説 数学編 理数編, 2009.
- 2) 文部科学省, 高等学校学習指導要領解説 理科編 理数編, 2009.
- 3) 安彦忠彦 編著: 高等学校 新学習指導要領の展開 総則編, 明治図書, 2009.
- 4) 吉田明史 編著: 高等学校 新学習指導要領の展開 数学科編, 明治図書, 2009.
- 5) 豊田哲也: 特集「高校教育から大学教育へ 共有する課題と現実の壁を考える」, とく talk No. 134, 徳大広報, 2009 冬号
- 6) 徳島大学, 第 2 回学生の学習に関する実態調査報告書 ラーニングライフ, 2011.
- 7) 徳島大学, 第 25 回学生生活実態調査報告書 キャンパスライフ, 2012.
- 8) 日本学術会議, 回答 大学教育の分野別質保証の在り方について, 2010.
- 9) 中央教育審議会, 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」(答申), 2012.
- 10) 徳島県教育学会・鳴門教育大学 共同研究, 徳島県における今後の人口減少社会に対応した教育の在り方研究 (中間まとめ), <http://www.pref.tokushima.jp/docs/2012121700026/files/chuukanntorimatome.pdf>, 2012.